

釧路町立別保小学校と連携し、広域交流型オンライン社会科学習を実践しました

【サムネイル画像（児童の顔マスク処理済）】

釧路校の学部生がICT・学習支援した  
広域交流型オンライン社会科学習  
（釧路町・東広島市・徳之島町の合計9校16学級の交流）



【導入部】釧路町・別保小の紹介場面



【授業担当者】別保小学校・中村亮太先生



【展開部】お米が取れない理由、  
酪農が盛んな理由を説明する場面



【ICT・学習支援スタッフ】左から、佐藤朝陽さん、加藤公悠さん、  
藤本莉央さん、村形厚志郎さん、瀧田勇仁さん、今井竜飛さん、  
近藤璃空さん、遠藤充さん

## 【本文】

北海道教育大学釧路校では、へき地小規模教育研究センターが中心となり、遠隔教育を実践できる現職教員や教員志望学生の力量形成を支援しています。その一環で、釧路校・社会科教育学研究室の講師・玉井慎也先生は、広島大学教育ビジョン研究センターと連携しながら、広域交流型オンライン社会科学学習への釧路管内の学校の参加を支援してきました。また、令和5年度・北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センターの研究助成を受け、現職教員や教員志望学生が遠隔教育に関わることでどのような学びを得たのか調査してきました（[2023年10月10日の記事](#)、[2023年12月20日](#)、[2024年1月18日の記事](#)も併せてご覧ください）。

2024年度も引き続き、広域交流型オンライン社会科学学習の実践や調査を実施しています。2024年5月15日には、今年度の1回目として、釧路町立別保小学校の中村亮太教諭と連携し、小5・社会科単元「国土の地形と気候の特色」に関連した2時間続きの遠隔交流学习「土地でできる作物を決めるのは、自然の力？人間の力？」を展開しました。本実践には、別保小学校の他、広島県東広島市の小学校7校14学級、鹿児島県徳之島町の小学校1校1学級が参加し、約400人の5年生と一緒に学びました。なお、本実践に関連し、広島大学教育ビジョン研究センターから学生スタッフ（広島大学大学院・博士課程後期 吉田純太郎さん）が支援員として運営に関わったり、学部2年生向けの講義「初等社会科教育法AC」で広域交流型オンライン学習の実践を紹介していただいたりしました（詳細は、[こちら](#)）。

本実践では、緯度の異なる3つの土地（北から釧路町・東広島市・徳之島町）でどのような作物が取れるのかを比較し、その理由が必ずしも「気温」だけでは決まらないことを探究しました。そして、気温以外の「自然条件（標高・土地・日照時間など）」と「社会条件（機械化・国や自治体のサポートなど）」によって、その土地で作られるものが変わってくることを理解していきました。

別保小学校の児童は、今回の遠隔交流学习の導入部で「釧路町の特色」を他地域の同学年に発表したり、展開部で「釧路町でお米が取れない理由（逆に、酪農が盛んな理由）」を解説したりしました。人口よりも牛の数が2倍近くいること、「北海道＝米」という図式が崩れたことに、東広島や徳之島の同学年は驚く様子があったようです。授業を実践した中村教諭は、「児童にとっても、そして私にとっても、普段は知ることのない、声を聞くことのない地域と交流し、日本の多様な地域の特色を見出す重要な機会になりました」とふり返っていました。

さて、本プロジェクトには、釧路校の学部生8名が参画し、ICT機器の操作支援や学習支援を担当したり、意図的に遠隔交流学习の効果や課題を観察したりしました。下記は、参画した学生の省察の結果です。8名が本実践を通して得た遠隔交流学习の運営・実践のノウハウが今後の主免教育実習などでいかに意識され、実行・発揮されるかを追跡していきたいと考えています。



釧路校では、遠隔教育に関わる現職教員や教員志望学生の力量形成を引き続き支援していきます。

社会科の遠隔交流学习の開発や実践、「大学の先生からの挑戦状」シリーズ、「地域学習用動画コンテンツ」にご関心がございましたら、ぜひ社会科教育学研究室・講師の玉井慎也までご連絡ください。

## 意図的な観察と主体的な ICT・学習支援を研修した5名の振り返り

【藤本 莉央さん（学部3年・社会科教育学研究室・玉井ゼミ）】

日本国内において、地域による農作物の収穫の特色について学んでいました。こういった単元は、授業者が知識伝達型で行うのではなく、現地と中継して行うことで、実感を持ちやすくなると感じました。単元によっては、広域交流型で行うことで各地の児童の主観をメタ認知することもできると感じました。現在、大学の講義等で「ICT活用」について学ぶ機会は少なく、私が今回運営側だった場合困難が多く生じると感じます。今回の運営の方法や行われていた進行の工夫を、私が行うことができるようにしたいと思います。また、今回生じた問題を、どのように解決できるかも考え、自分の技術に落とし込みたいと考えます。

【村形 厚志郎さん（学部3年・社会科教育学研究室・玉井ゼミ）】

広域交流型オンライン学習の授業の補助をしてみて、これまで私が受けてきた被教育体験や授業観察、大学で学んだこととは少し異なる、より先進的な授業の補助を体験でき、とても勉強になりました。他の地域の学校と遠隔でつないで学習することで、児童はより身近に他地域を感じるができると思いました。私が教員となったときは、このような授業を実践してみたり、ICTを活用して子どもたちがより身近に他地域の社会的事象を感じるができる授業をしたいです。

【今井 竜飛さん（学部3年・社会科教育学研究室・山元ゼミ）】

ICTについて学ぶ機会は少ないため、とても貴重な経験となりました。接続に関することだけでなく、教員が児童の発言後に整理したり、難しい語句が出てきた際に確認したりするなど、遠隔授業の課題である聞き取りにくさや混乱を防ぐための進行方法も学ぶことができました。また、農家との中継は子どもたちの学習意欲を高める効果があると感じました。今後は、自分でアンケートフォームを作成し、児童の考えを効率的に集計できるようになりたいと考えています。このスキルを身につけ、児童観に合った授業を教育実習で行いたいと思います。

【加藤 公悠さん（学部3年・社会科教育学研究室・山元ゼミ）】

今回 ICT を活用した広域交流型オンライン授業について学ぶとても良い機会になりました。遠隔で様々な場所や地域と接続しながら授業を進めることで、子どもたちの多様な意見や反応を見ることができるとともに、農家と中継を繋ぐことで地域ごとにどのような農作物が収穫出来るのか実感が持ちやすかったです。今後は、自分自身が教壇に立った際に、様々な地域と交流しながら授業を進めていけるように技術と授業力等を高めていきたいと思っています。

【瀧田 勇仁さん（学部3年・社会科教育学研究室・山元ゼミ）】

これまでの観察実習などでは、ICTに関連することについて学習する機会があまりなかったため、貴重な経験となりました。今まで教育現場で見てきた ICT の活用方法は教科書や資料を提示するというものに限定されており、今回のように広域で交流するための活用方法は見たことがありませんでした。しかし、今回の活動を通して、広域交流で学習を行うことのメリットとデメリットを見つけることができました。この経験を今後の教育実習や将来の学校現場に反映させていきたいと考えています。

## インフォーマルな観察実習として参画した3名のふり返り

【近藤 璃空さん（学部3年・地歴研究室・地理ゼミ）】

私は ICT 機器を用いた教育について今回の広域交流型オンライン学習を通して具体的にイメージすることができました。ICT 機器を用いて遠隔交流を行うことによって離れた場所に住んでいる人たちの話を聞き、より深く生きてきた知識を身に付けさせることができると感じました。今回学んだことを踏まえて今後、遠隔交流だからこそできる授業方法や ICT 機器のトラブル対応の方法、現地の人の話を聞くことによる児童・生徒の興味・関心の高め方について学んでいきたいです。

【遠藤 充さん（学部3年・地歴研究室・日本史ゼミ）】

今回の学習では、違う地域に住む人々の意見に触れることで考え方には多様性があることに気づき、多角的な視点を持つための練習になるということに気が付きました。同じ地域に住む子どもたちと学ぶ以上、多様な考え方や価値観があるということに気付くことは難しいと思いますが、それを得るために普段関わりのない他者の視点を取り入れることはとても重要だと感じました。また、ICT の使い方はもちろん、それに不備が生じたときにどのように授業を進めていくのかということも考えなければならないということも理解できました。

【佐藤 朝陽さん（学部3年・地歴研究室・日本史ゼミ）】

今回 ICT を用いた広域交流型オンライン社会科学習の様子を観察することで、児童たちの深い理解に効果的であると思う「実感」を伴った学習をおこなうことができるという利点があると感じました。児童たちがインターネットを介してつながることで、他の地域の様子をリアルタイムで見ることができる。このことは教科書では難しいことであるため利点であると感じました。しかし課題としては、インターネットのトラブルが見られました。そのため、教師は不測の事態に対する対応力や、他の手立てを考えておく必要があると考えました。